

国産マイノリティを助けるのが正義なのか

2004年11月17日に民主党所属

の佐藤謙一郎・衆議院議員が国会において私が翌年の栽培計画と過去栽培したGM大豆について政府に質問主意書を提出している(以下要約)。
○栽培計画を中止したが、問題の先送り過ぎないので何らかの対策を講じなければならない。

○GMと説明しないで過去に栽培・出荷していた。

○そのGM大豆は交付金の適応を受け流通販売された。

○消費者は極少数数量といえども混入・流通していたことにショック。

さすが批判上手で新たな生産を得意としない民主党の議員である。実を射た質問をされていた。消費者だけでなく私もショックを受けた。輸入はGMでもよいが国産はノンGMでというような棲み分けを当時の社会はできていた、との解釈もできる。

それはおかしい。なぜならば当時でさえ直接可食する豆腐・納豆用大豆の輸入量は60〜80万tといわれ、それは国産の3〜4倍の量であり現在も変化はない。

残念ながら流通・販売のリアリティシヨアの現場ではすでに国産はマ

イノリティのグループである。だからそのグループを助けるのが正義なのか？

その結果、我々生産者が栽培・販売する国産大豆の単位面積当たりの収量は40年間まったく変わっていない。

それに同調するかのように「宮井さん、国産大豆はたくさん取れちゃダメなんですよ、だって販売価値が下が

るでしょ」なんてことを平気でぶちかます国賊者の発言がまかり通るのだから、金髪・ブルーアイにはこのアジアの隅っこに生息するスピーシーズ(生き物)を理解できることなどありえないだろう。

そして流通はすでに国産大豆に見切りをつけているのかもしれない。納豆用北海道産大豆「すずまる」を米国に持っていき、現地で栽培してsumamaruの名前で輸入して、日本国内で販売することは法的にまったく問題ないことくらい、業界では当たり前だということを消費者はご存じないのかもしれない。

そして私たち30名ほどが行なっ

Vol.95

それでも私はやっていた...



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

いるように米国アイオワ州原産のノンGM大豆を長沼で栽培・収穫・販売することが国産大豆100%だと言いつけるのだから、グローバル化の流れが農業の生産の現場にも押し寄せているといつてよいだろう。おれには関係ない？ まっ、そうだろうな。イングリッシュも英語も話せないのに、自分の子どもには英語を話せるようになってほしいと考え、LA

オレにも
言わせる!

北海道長沼発
ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

あたりの大学入学前の語学研修で葉
漬けジャンキーになって、身も心も
ジャンキー状態になることは決して
日本国家、国民の利益になるはずが
ない。

たしかに、栽培して当時の交付金
もすっかりいただいたのは事実であ
る。同年10月1日の北海道毎日新聞
には「GM大豆栽培計画」と書か
れ、10日ほど過ぎてから、岩見沢に
あった農政事務所（農水出先機関）
の担当者2名が私の自宅に、役所が
よくやるアポなしでやって来た。大
豆収穫前の機械整備で忙しいのに、
まいったな〜と思いつつながら対応し
た。

そのときに種子購入先、栽培場所、
2年間にわたり栽培したこと、出荷
量や出荷先の業者の名前も伝えた。

ただその後の国会内では、時の政
府、小泉純一郎内閣総理大臣が河野
洋平衆議院議長にあてた回答書では
「販売されたことがあるか否かにつ
いて承知していない」っておかしく
ないかあ〜。まあいいか、好きに解
釈してください。

非選択性除草剤散布に おける微妙な側面

この回答書にはよいことも書かれ
ている。「法規制を設ける必要はな
いと考えている」。金髪・ブルーア

イが考え作った大豆を政府・消費者・
流通・販売・消費者そして生産者も
拒否できる能力を現在の日本人は持
ち合わせていないのだから。

先の佐藤議員の質問書では、大豆
生育中にラウンドアップが使用され
ることは農薬取締法違反であるとも
言われた。ご指摘どおりである。

しかしこのラウンドアップは現在
ラウンドアップ・マックスロードに
進化し、収穫前日まで使用ができ、
最大4回も散布使用可能なことから
農薬取締法に感謝する。ほかにもバ
イエルのバスタ、丸和バイオケミカ
ルのロロックス、あのお菓子メーカ
ー明治製菓が開発したザクサなどは
正々堂々と大豆生育中に散布できる
のだから、生育中は散布できないな
んていう時代に対応できない発言は
排除したい。

これらの非選択性除草剤の使用方
法は株間処理で行なうとある。以前
ある非選択性除草剤を販売する会社
のお客様相談室に電話をかけ、この
株間処理について相談をした。「株
間は何cmを想定しているのですか？
一般的に畝幅の60cmや66cmで散布
したら農薬取締法違反ですか？」だ
ったと思う。

電話の担当者は「ん〜」。
追っかけ「GM大豆を栽培し農薬
散布して多少上のほうに飛散したら

農薬取締法違反でしょうか？」と聞
いた。私が何を言っているのか察
していたようで「いいんじゃないで
すか」だって。早い話、GM大豆に
関して除草剤散布の法的な問題は対
応できそうである。

日本人のGM嫌いは カマキリの斧程度

株間処理は私がGM大豆栽培計画
を発表した翌年の05年くらいから長
沼で普及しはじめた。もし手作業で
やっていたら1年後の収穫になって
しまうので、それなりの機械で対応
することになる。すべては雑草対策
のためである。

雑草なんて、という畑場の生産者
が多いが、水田からの転作圃場は土
そのものが雑草の塊であり、ここぞ
とばかりに多種多様な雑草が現れ
る。転作を始めたころは米国でジ
ンズの染色にも使われたスギナ、英
語でデイフラワーといわれるように
日が当たると爆発的に生育するツユ
クサ。最近では、英語でカッパーリ
フといわれ、なぜか長沼だけで爆発
的に増えているエノキグサ。ラウン
ドアップでは枯れないのでザクサ、
バスタ、ロロックスを株間散布する
ことになる。

言うのは簡単だが、対応するため
の125馬力トラクターは2000

万円するし、スプレーヤーは国産で
は作業速度が遅すぎるので400万
円の株間専用の米国製を購入した。
不思議な話だ。GMはだめだと言
いながらそれなりの雑草や面積に対
応できる作業機は国産ではなく結局
米国製になるのだから、所詮日本人
のGM嫌いは蟻螂の斧（カマキリの
斧）程度の意味しかないのだろうね。

余談だが安倍晋三総理大臣の奥様
である昭恵さんの実家は森永製菓で
ある。まさか首相在任中に実家のラ
イバル明治製菓が開発した非選択性
除草剤ザクサのみがGM大豆に使用
できます！…なんてことはないと
思います。

ところで私に物申した当時の佐藤
議員は、ウイキペディアによると現
在、自然食宅配会社の配達員を務め
ているとのこと。さすが終始一貫の
御姿は素晴らしいが、嘘つきと流れ
を読めない末路であることは間違
ない。

それでも地球は回っていると
たガリレオのようになれなくても、
あるときは近くから、あるときは遠
くからしっかりとサングラスを装着
して太陽を見据え、楯円運動をして
いるとケプラーが発見したように、
必ず訪れるその日のために、GM作
物の優位性を貫きたいヒール・ミヤ
イでいたい。